【319】

氏　名（本籍）	加藤隆之（東京都）（か とう たか ゆき）
学位の種類	博　士（芸術学）
学位記番号	博甲第 5133 号
学位授与年月日	平成 21 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	**テンペラ絵具と油絵具による混合技法の研究** －油絵具の半透明層の使用とその表現方法について－

主　査	筑波大学教授	博士（芸術学）	岡崎昭夫
副　査	筑波大学教授		玉川信一
副　査	筑波大学准教授	博士（芸術学）	内藤定壽
副　査	筑波大学准教授	博士（芸術学）	石崎和宏

論文の内容の要旨

（目的）

テンペラ絵具と油絵具の併用による混合技法は，マックス･デルナーの『絵画技術体系』によってファン･アイク兄弟の古典的な絵画技法に対する一つの仮説として提唱された。本論では，この混合技法による制作方法について絵画制作者の視点からその内容を再考し，実験によって技術的な側面を確認するとともに今日的な使用方法について新しい提案を試みるものである。特に，制作工程の合理化や柔軟で感覚的な表現の獲得を実現するために，具体的な作品制作と併行して考察を行う。如何にして柔軟な制作方法と感覚的な表現の手立てを確立するか。従来の透明色を用いた混合技法の技術的かつ表現効果上の硬直性を払拭するために，制作過程において半透明の油絵具の層を加えることが，どのような効果を生み，それが今日的な表現にどのように繋がるのかを実例によって検証する。

本研究は，混合技法に今日的な表現の可能性と新たな技術的視点を付加することで，絵画制作における独自の表現様式を確立することを目的とする。

（対象と方法）

第一章では，近代日本の混合技法の受容過程を技術的側面から概観する。フォンタネージが伝統的な油彩技法を講義する中でテンペラ絵具の使用についても言及していることを発端にして，特に戦後のウィーン幻想派絵画の紹介と関連する技法書の刊行，留学によって混合技法を本格的に学んだ画家への取材等で構成される。

第二章では，マックス・デルナー著『絵画技術体系』によって示されている基本的な混合技法の制作過程を，記述を基に手板見本を作成し確認していく。混合技法の特徴となる古典の分業に従った形と色を分離する制作方法を用いて，樹脂油絵具のグレーズによる彩色と卵テンペラ絵具による白色浮出で形や光の描画を行い，この技法の長所と短所として考えられる要素を挙げる。

第三章では，混合技法に用いるメディウムについて画用液を中心に取り上げる。乾性油，樹脂溶液，揮発性油の種類と性質を述べた上で，特に混合技法における描画で重要な役割を担う樹脂溶液の作製について実

験を行い，その理想的な処方を検討している。実際に市販されている多種の樹脂，溶剤を用いた詳細な実験によって，極めて実践的な結果が得られた。

第四章では，画面の重層構造におけるインプリマトゥーラと白色浮出の表現効果について，手板見本による実験とその効果を整理している。ここではインプリマトゥーラに使用するテンペラ絵具と油絵具の比較や有色下地の色の違いによる上層への影響が確認された。また，テンペラ絵具と油絵具の白の使用方法を検討する中で，それぞれの特性から広い描画面を塗る場合は油絵具で，細部を描写する場合はテンペラ絵具でという使い分けを行うことで描画の時間短縮と合理化につなげられる可能性を確認した。

第五章では本研究の中心的課題である半透明層の使用について述べる。定義の難しい半透明層という絵画平面上の絵具の状態について，その意味するところの範囲を定めながら，塗布方法やその半透明層上に行うテンペラ絵具の白色浮出の効果を，作製した手板見本による資料を基に解説検証する。混合技法の技法的短所である表現の硬さが，半透明層の使用によって部分的に解消する点を手板見本で紹介する。

第六章で，著者の制作した作品の変遷をたどりながら，従来の古典的な混合技法による作品の問題点を指摘したうえで，半透明層の使用による見本作品の制作を過程ごとに解説し，半透明層の効果がその欠点の解消に有効となる段階を提示している。また，基本的な描画を整理する一環として，混合技法による描画対象に適しているモチーフを，手板見本を作製して紹介する。

（結果）

混合技法の基本的な描画過程の再構築について，マックス・デルナーの提唱した制作工程を基にしての手板見本の製作と解説によって，視覚的にも工程手順が整理されて明確となり，その特徴としての優れた点と技術的な短所も明らかにされた。さらに混合技法を著者の作例も含めて様々な視点から分析し，これによって，古典的混合技法のシステムの理解が深まるとともに，今日的な混合技法への展開の必要性から，油絵具による半透明層の描画が一つの対処方法として有効なものであるという結論に至った。

（考察）

古典的な混合技法を使用する絵画制作においては，下素描による完成図の必要性と制作工程の煩雑さは必ずしも短所とは言えないが，今日的な絵画制作ではそれによって生ずる生硬な印象はできれば避けたい要素である。本研究では混合技法の原理に従いながらも，そこに新たな視点として油絵具による半透明層の使用を加えることが，描画過程の合理化といわゆる絵画表現上での半調子の幅の拡大につながる結果が得られ，その問題点がある程度は解決される。

審 査 の 結 果 の 要 旨

混合技法の専門技法書としては一般的なものであるマックス・デルナーの『絵画技術体系』に基本的には準拠しつつ，混合技法そのものの制作過程を視覚的に明確化し，絵画制作者として，そこに新しい視点を導入しようとする著者の目的は一定の成果を得ている。

混合技法における半透明層の使用は，油絵具であれテンペラ絵具であれ，厳密に言えば従来にもあったと思われるが，それらを面的塗布と線的な描出に使い分け制作過程に積極的に導入することで，著者が混合技法に対して持っていた問題点の解決を図ったことは新しい知見の獲得として評価したい。

さらに多数の手板見本の作製とそれによって視覚化された結果は，最終的に絵画作品制作への実践的な応用へとつながるものであり，具体的成果である。第三章の樹脂の溶解実験は，市販されている不安定な素材によるものも混在しており，全ての結果に確実性があるとは言えないが，逆に市販されている製品内容の出自まで明確にされたことで今後の研究に寄与する内容である。

よって，著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。